



右の記事は、今から 22 年前の今日 11 月 29 日の朝日新聞夕刊に載っていたものです。最後の行を読んで思わずこみ上げるものがあり、切り取ってファイルにはさんでおきました。おそらく同じような気持ちになった人がたくさんいたのでしょう。この記事に基づいて少なくとも 2 冊の本が出版され、ビデオが一本作られました。でもこの記事のままだが一番好きです。中学校の教員として 25 年間勤めてきた経験から、この記事からはいろいろなことが読み取れ、また考えさせられます。それでも読むたびに同じように胸に迫るものがあるのは、中学生の純粋な思いが胸を打つからかもしれません。長い事学校で子どもたちと過ごしていると、子どもたちからこのような感動をもらうことがあります。そんな時、教師という仕事を選んでつくづく良かったと思います。この新田小学校でも、毎日のように小さな発見、小さなつぶやき、小さな感動が繰り返されています。子どもの成長は、それぞれのもので感動なのかもしれません。

(校長 高橋 実)

みんなで跳んだ

「大縄跳びで、彼を外すのはいやなんです。」ある中学校の運動会の前日。先生にクラスの一人が言ってきた。長さ二十メートルほどの縄をクラス全員で跳び、合計回数を競う。だが、彼だけが跳べない。一人で、次に二人で練習した。みんなで声をかけてもみた。なお引かなかった。

一緒に跳ぶのが平等なのか。外すのが思いやりなのか。先生は迷いながら、彼を声かけ役にしていた。一人みんな放課後に話し合った。一人

ずつ意見を言う。三十六人中「勝てなくなるから入れない」が十三人、「チームワークが大切だから一緒に」が十一人。

後半にだけ入れる折衷案が出た。「ここらで落ち着くか」と思った先生は採決した。

ところが、「反対」が二十三人。「彼には全然出ないよりつらい」「みんながばらばらになっていくのはイヤ」さらに「跳びたくないのって彼にきいたら、跳びたいって。だから、入れたい」ばちばちと拍手が起きた。別の子が立つ。「勝ち負けなんて」拍手が大きくなる。

「本音聞かして。それでいいののか？」

先生は涙声になっていた。全員が「一緒に」に手をあげた。

本番では五クラス中のビリだった。それでも、彼は初めて続けて跳べた。友達と手をつないで、次は一人で、全部で七十一回跳んだ。

彼は後で作文に書いた。

「とびはねるほどうれしいです。今日のぼくは絶好調でした」心配でみんなの足元ばかり見ていた先生が、ほかの生徒の作文で知ったことがある。

「みんな、とびながら泣いています」

朝日新聞夕刊「変換キー」より
1997年 11月 29日